

ぐるっけ

平成六年七月二十七日第三種郵便物認可  
平成二十三年一月一日発行(毎月一回一日発行)  
第十七巻第九号(通巻第二〇一号)

鈴



ぐるっけ

新春号

俳句雑誌

GLOCKE

第201号

1. 2011

謹賀新年

翁面

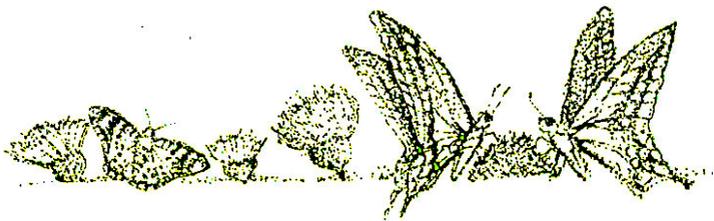
品川 鈴子

初能の面容れ朱房玉手箱

面箱の朱の緒ひもとく能初め

翁面舞ひて初袍ひけらかす

初能の三つ拍子踏む  
白色尉はくしきじょう



初能に床鏡なす翁の舞

黒尉が鈴振り躍る種時きか

初尉が鈴の舞はた鳥飛び

冬桜に凭る若者 求もと女めづ塚か

喜寿すぎて走らぬと決め年の暮れ

若者のハグうけ喜寿の年を越ゆ



# 玉

# 鈴

# 吟

愛媛 鈴木てるみ

枕木に昼顔絡み無人駅  
祭果て無人の駅に缶の芥  
祭果て解体壇尻櫃詰へ  
新春と思えるジャンプ虎ラガー  
初試合負けて男の涙せり

大阪 鈴木 浩子

コーヒーの一飲みごとに秋入り  
秋の水汲まむ商家の家内井戸  
ふつと出る故郷ことば衣被  
手の甲に予定を書きて暮の秋  
洋行の靴杖鞆小鳥来る

香川 陶山 泰子

星流れ女主人となりにけり  
空耳に鍵開く音秋灯下  
割り箸にくるむ綿菓子秋の雲  
キラキラと湖面輝く秋の朝  
竜神の潜む大池秋微雨

岡山 瀬口ゆみ子

秋冷は気弱な肩に忍び寄る  
人癒し己傷つく赤とんぼ  
牡鹿立つ座しても威風損なわず  
秋日和湖底見渡す休火山  
穂芒の山肌すべるハングライダー

兵庫 高橋 大三

居留地の新涼道雄の「越天楽」  
穂田ごとに萌葱・浅葱と黄金など  
和田岬線背の高き猫じやらし  
低く舞へど落つることなし秋の蝶  
源氏好き笛聴きながら須磨の月

大阪 竹下 昭子

あっけなく逝きし今宵は秋祭  
ひと声の別れもなくて露の旅  
六文銭持ちちて旅立ち霧時雨  
心電図見返すばかり秋の夜半  
主なくたった一人の冬仕度

大阪 武田ともこ

梨むくや指の針跡すこし沁み  
青森より来しライトバン林檎売り  
秋の雨正式俳諧おごそかに  
秋霖に明るく御座す摩耶夫人  
障子貼り昨夜いさかひ中休み

愛媛 武智 恭子

群れて咲く先まで紅し水引草  
大蠟螂斧振りあげて野道行く  
秋祭 一体 走りに 人の波  
艶光る 紫 式部 鉛色 に  
彩映えて遠くに見ゆる野菊咲く

大阪 谷 泰子

山鳩の声透き通る秋彼岸  
姉見舞ひ釣瓶落しの家路なる  
冷やかに訃報飛び込む朝まだき  
身に入むや柩を囲む幼どち  
姉逝きて庭にはびこる藪枯し

大阪 角谷美恵子

神苑にコスモス揺るる行の禮  
花野へとスローモーション息あふる  
大役はじやんけんで得て菊日和  
声明に控へる連衆菊の供華  
僧の持つ灯火頼りに猪の道

愛媛 年森 恭子

栗拾ふ縄文人の腹をもて  
青蜜柑シエフは酸味に使ひけり  
ポケットに棗をひとつ散歩道  
リレーゾーン入れ替へしきり運動会  
島の里あとかたもなし秋出水

兵庫 内藤 三男

今朝の風待ちちて弾けし鳳仙花  
夕焼に押され老農戻り来し  
秋茄子のたしかな味を嫁と分く  
入口のありて出口のなき花野  
倒れたる稲は起こさず案山子翁

兵庫 中尾 廣美

凶鑑にもなくて小さき花野なす  
魚群れいるかが群れて人が群れ  
我に寄り何伝えんや小さき蟹  
天草の棚田天まで曼珠沙華  
秋暁に音と水尾のみ舟帰る

大阪 中島 霞

秋日燦一島覆ふ大聖堂  
露湿る石段幾度上り下り  
秋光の沖へ開けありミサのドア  
冷やかに石の僧房大広間  
さやけしや大聖堂へ寄せる濤

兵庫 中島 節子

CDを流し続けて通夜冴ゆる  
住職のふるまふ粥に湯気たちて  
寒菊を放ち引導読み渡す  
喪主となり位牌持つ手の悴めり  
戒名を呟く毎に息白し

大阪 中田 寿子

秋刀魚焼く備長炭と七輪で  
蜻蛉つりやはり一番餓鬼大将  
遠目にもそれは危うい毒茸  
長き夜もひとり楽しむ術を得て  
噎せ返る菊の香まとう六文銭

神奈川 永塚 尚代

帚木の色づく朝風の丘  
秋暑く失せてしまひし俳句脳  
祖母達のパン喰ひ競走空高し  
だんじりの轍木屑に秋の雨  
長き夜の長湯は本の区切りまで

大阪 野口喜久子

秋冷をまつさきに知る膝頭  
山栗を南無と言ひつつ挽ぎにけり  
巻尺のまつすぐ伸びて曼珠沙華  
放ちやる犬のあとさき草の露  
形見とて未だ交信薦紅葉

兵庫 蓮尾みどり

裕子逝き紅まんさくの帰り花  
晩節のいよいよ盛ん千日紅  
心地よき火照り新酒の利酒に  
出し汁と黄身の渦巻とろろ汁  
小さき手の押さえし鉢や薯蕷播る

兵庫 長谷川 鮎

駄洒落にて笑わせ「老い」の初講義  
新年会横線加え阿弥陀くじ  
散骨の話で終る新年会  
土産には万葉集を山眠る  
ピザ店の重き戸押せば初雪に

兵庫 林 哲夫

初めての医師を訪ふ道白桔梗  
秋暑し腸の検査を待つ寝椅子  
残る蚊や自説曲げざる老夫婦  
弁当はいつも海苔巻運動会  
点滴の管揺れ止まずぞぞる寒

兵庫 林 美智

によつきりとなぜか芝生に毒茸  
有耶無耶の庭は大輪野菊など  
懐古好み行李探りて秋袷  
目の前をすいーとよぎる赤とんぼ  
三本の足も二本に秋深し

# 鈴の奏

品川鈴子選

バナナダの似合ふ菩薩や寒椿 兵庫 太田 實

初参り奥へ誘ふ朱の橋

新春の御堂を映す菘菜池

主待つ犬も神妙初参り

朝涼し聖堂に置く花鋏

脱藩の古地図しみじみ秋扇

新米を指にさわさわ摺り切りし

捨猫と子の肩濡らす秋の雨

胸奥に畳みし踊ふつと出る

片付かぬものに埋れる敗戦日

風鈴のチリとも鳴らず夕暮るる

炎昼の街中ひくく鶏の声

黄葉して油彩画となる苦楽園

薄揺れ幼な姉妹の魔女ごっこ

りんご剥くひたむきな瞳の幼な児よ

今生の余白となりし石菫の花

曼珠沙華畑彩り名残り紅

兵庫

太田

實

兵庫

和賀

俊子

東京

松本

アイ

兵庫

竹内

孝子

兵庫

堀口香代子

山道を木切れ杖にし紅葉狩り

秋の日の夫婦の散歩無口なり

色鳥にカメラ手にする窓辺かな

障子洗ひ昔話を語る父

番犬の尾に金柑の落ちてをり

コスモスの風が好きよと囁けり

臍を曲げ納め処を探る秋

鍬洗う流れの向こう釣舟草

間引菜の香齒触り晩ごはん

菜を間引く屈みし腰の張りにけり

芋の葉の人動くごと揺れにけり

誓子像真中に秋の連句式

朝顔の種選る息を吹きかけて

摩耶山に連句詠む声身にぞ入む

どんぐりを握りしままのすべり台

大通り奥の紀寺に秋詰まり

爽やかに紀氏の末裔の隠れ寺

香川

田中真由美

兵庫

猿橋二三雄

兵庫

前田

玲子

兵庫

木本

彦

兵庫

木本

彦

秋草のしじまの紀寺経の声

蟋蟀か白裸の弥陀にへばりつき

芒野の果てより乗りしリフトかな

湿原の千古の苔に水澄めり

渡し場の名残り留むる露の石

秋簾衲衣の裾に絡まれる

肩書はずし交通整理棉の秋

新綿で人形座蒲団五枚でき

綿吹けば座繰の音の懐かしき

綿摘むや母の温もり手に残り

昼下りザリガニ釣りの子の眼

腰かけてふかしタバコの秋思なる

池の面にボールゆらゆら赤とんぼ

妣の面影石白に秋の水

ひよどりの雑木林となりにけり

虫の音や子の喘息のをさまりて

父と子の櫃に足りたる今年米

神戸より鈴の形の秋の雲

うす紅の茎に合はせて鳳仙花

秋桜俯き揃ふ雨の朝

大銀杏天よりポロポロ転がせて

兵庫 中村 碧泉

神奈川 八木 紀子

兵庫 本木下清美

埼玉 松岡 水学

兵庫 澤浦 緑

あちこちに実石榴描かれアルハンブラ

原爆忌孫らに話す夕餉時

若者も水持ち歩く秋暑し

静かなる歩みの仕舞秋ふかく

秋好日檜垣の能に酔いしれる

露律駆け来る小犬胴震ひ

十字架も処どころに露の墓地

露宿しをり公園の忘れ杖

校庭にバケツを並べ豊の秋

冷やかに覆ひ尽くせり顔パツク

離れ住む母にも子にも同じ月

納骨へ向かふ親子か曼珠沙華

娘等の長き睫や曼珠沙華

猛暑去り突然の秋戸惑いぬ

扇風機収めて部屋の暗さかな

罽雲路行く人の笑い声

秋日和パン作りする魔法の手

早々と秋の服着る瘦せつぽち

久し振りなる師は秋の似合う女

糸芒初七日故山に掌を合せ

後の月夜毎温みし食揃ふ

兵庫 松尾 静代

東京 木野 裕美

堤 節子

樋口 正輝

神奈川 山本久美子

福井 木曾 鈴子

秀 鈴 記

巻頭 三句 品川 鈴子 評  
四句〜十五句 河村 泰子 //

\*選句は全て 品川鈴子

バナナダの似合ふ菩薩や寒椿

太田 實

バンダナは「絞り染め」の意味の意味のヒンディー語 bandanu から）赤や青の地色に草花や勾玉のような白い紋様を染め抜いたスカーフ、ハンカチーフ、現在は原色のプリント柄も多い。

椿の紅にも勝る派手な色を纏うのはインドから伝わる佛で、サンスクリットの梵字を当て成就・吉祥を司る菩薩も、極彩色のあでやかな姿が似合あう。

新米を指にさわさわ摺り切りし

和賀 俊子

新米の手触りは「さわさわ」と云うにふさわしい快さ。早速杵にたつぷりと掬い思わず器の縁を指でじかに撫でたくなる。杵掻き用の丸棒をさし措いて、新米の炊事を肌で感じて楽しむのも主婦の特権。

胸奥に畳みし踊ふつと出る

松本 アイ

故郷には風土に根ざした踊りが様々に伝わり、幼い頃からその音曲と身振りが滲みこんで体が憶えている。誰もが胸の奥に畳み込んでいる懐かしさ。

わが国では総じて太平洋沿いには、阿波踊りやよさこい節など極めて陽気で能動的なもの。それに対して内陸や東北では仙台のさんさ時雨をはじめ風の盆・郡上踊り・佐渡おけさ・傘踊り等、どれも静で哀切な情緒を纏い、地域の人々の気質にも及ぶらしい。

今生の余白となりし石路の花

竹内 孝子

生命を受けこの世に生きている間というのは、長くもあり短くもある。気がつけば八十路に入っていた。充実した人生を送った方ほど謙虚だ。ひかえめに、これからの人生を余白と表現された。余生ではなく余白により、むしろ純粹な生き方に満足と余裕が感じられる。黄色の石路の花も一段と黄を増して。いつまでもお元氣にお過ごしください。

曼珠沙華畑彩り名残り紅

堀口香代子

誓子像真中に秋の連句式

前田 玲子

曼珠沙華は彼岸花の別名。秋の彼岸の頃に開花するが、昨年は猛暑が長く、全国的に一〜二週間程遅れたそう。田畑の縁などに群生する朱赤色は、自らの赤さを堪えかねて散るのか、失われた赤がいつそう赤く鮮やかに余韻を残す。

臍を曲げ納め処を探る秋

田中真由美

臍を曲げる。臍で茶を沸かすなど慣用語として用いられるが、機嫌を損じて意固地になったとき、どこかに納めて気分を一扫したいところ。下五の探る秋で句に品が生まれた。「臍を曲げ」を昨夏の猛暑とかけて味わつてもおもしろい。

鍬洗う流れの向こう釣舟草

猿橋二三雄

長閑な田園風景が広がる。畑仕事の後の鍬や鋤を洗うのは、次の作業のための大切な仕事。傍にせせらぎを聞きながら、収穫された野菜や根菜類もここで洗い土を落とす。恵まれた環境で育つ野菜はさぞおいしそうですね。

昨秋十月三日、摩耶山天上寺金堂（神戸市）に於て、正式俳諧が興行された。一昨年建立された山口誓子の句碑の安泰を祈願し、脇起源氏六十韻「夕焼けて」の巻、奉納式が成功裡に終わった。誓子像は、羽織袴に黒縁の太い眼鏡、頭には宗匠頭巾と古式豊かに。像の前には鈴子先生御指導のもと、ひよどり連句会の方々が厳かな中に文台捌きなど進められた。見学も大勢来られ、神戸新聞にも報道された。

大通り奥の紀寺に秋詰まり

木本 蔭

賑やかな通りから路地に入ると、一足飛びに静寂な紀寺の境内になる。そこは秋草が咲き乱れ、しじまの内に読経が響く。紀氏の末商の隠れ寺として、廣大ではないが秋のよそおいが詰まっている。作者の紀寺を詠まれた四句から、訪れたことのない私にも想いを巡らせることができました。氏寺でしょうか。藤原氏の興福寺、和気氏の神護寺のように。

(以下略)